

「させていただく」に思うこと

のりまつ よしこ
則松 佳子

●日本教職員組合・中央執行副委員長

永井愛という劇作家の戯曲に「ら抜き殺意」という作品がある。残念ながら芝居を観ることは叶わなかったが、脚本自体がものすごく面白く、その昔一気に読んでしまった。この作品が発表された1997年当時は、“来れる”“食べれる”“起きれる”などのいわゆる「ら抜き言葉」が「日本語の乱れの象徴」として話題になっていた時期だ。ら抜きを嫌う国語教員、矢鱈とら抜きで話す男、男女別の話し方を乗り越えたい女などが登場するコメディで、言葉へのこだわりの違いから殺意が生じる…という展開。当時多くの人が違和感を持っていた「ら抜き言葉」だが、『国語に関する世論調査』の結果の概要（文化庁）によると、2015年の段階で、「ら抜き言葉」を遣う人が遣わない人の割合を上回り、多数派になったそうだ。

言葉は元来揺れるもの、普遍性のないものだ。私自身、そう思っている。

…そう思っているものの、実は最近どうしても気になって仕方がないことがある。それは、遜りの表現「～させていただく」が世間で以前よりも多用されていることだ。遜りの表現をあまりにたくさん遣うと、相手に「本当に遜っているのか？ポーズなんじゃないか？」と感じさせ、意に反して相手を遠ざけてしまう場合もあるように思う。

“作ら^じさせていただく”“行か^じさせていただく”などの誤用（本来はそれぞれ“作らせていただく”“行かせていただく”であろう）も気になるが、有名人や「地位ある人」が言っている

のを連日メディアが流し続けているので、違和感を持つ人はこの先減っていき、それほど遠くない未来に国語辞典に載るようにもなるかもしれない。

謙遜表現自体が多用されている現状には、私はどうしても引かかってしまう。それは、忘れられないラジオの歌番組の一場面があるからだ。ステージで司会者とやり取りをしていた一人の歌手は「させていただく」をたくさん遣いながら話していた。その歌手が病気で脚を手術した話になったとき、本人が「…それで脚を切断させていただきました」と言ったのだ。その瞬間、私は「一体誰がこの人に自分の脚のことを『切断させていただいた』なんて言わせたの!？」と思い、悲しみと怒りが入り混じったような複雑な感情になった。しかしその背景にあったのは、「とにかく丁寧に話さなければならぬ」「謙譲語を遣っていればとにかく安心」とでもいうような、私も含む、世間の雰囲気であることは間違いないだろう。

言葉への違和感にとことん向き合ってみることは、時にとても大切なものかもしれない。もしよければ、「謙遜表現を遣い過ぎない」ことに少しだけこだわってみていただけないだろうか。

“させていただきます”を“やります”と、“作らせていただきます”を“作ります”と、“行かせていただきます”を“行きます”と言い換えてみると、なんだかすっきりして元気が出てくるようにも感じる。

是非とも一緒に！